

授業研究を軸にした教師教育に関する国際共同研究の プラットフォームづくり

研究代表者 金 鍾成（社会系コース）
研究分担者 吉田 成章（教育学系コース）
岩田昌太郎（健康スポーツ教育系コース）
川口 広美（社会系コース）

I 研究の背景と目的

日本の授業研究は、TIMSS ビデオ調査後の 1990 年代から PISA ショックを経た 2000 年代にかけて、「Lesson Study」という用語で世界的に知られるようになった。一緒に授業をデザインし、授業を互いに見合い、その観察に基づいた授業を省察・洗練していくプロセスとしての Lesson Study は、理論と実践をつなぐ、さらには教員集団の文化を変えられる方法論として世界の教育者から注目を浴び始めた（Fernandez, 2002）。また、2007 年に設立された世界授業研究学会（World Association of Lesson Studies: WALs）はこの流れをさらに加速させた。そして、JICA 等による国際協力や「EDU-Port ニッポン」といった日本型教育を輸出しようとする文脈とも合流して、既存の教師教育と接合しながら Lesson Study は世界的に展開されてきている。

しかしながら、Lesson Study は日本の授業研究が有する多様な意味合いを教員研修に限定してしまうとの指摘もある（Lewis, Perry, & Murata, 2006）。日本の授業研究は、教員研修の側面だけではなく、授業に関する現象学的な研究やカリキュラム研究の側面をも有する（National Association for the Study of Educational Methods, 2011）ためである。これらの三つの側面が相互作用しながら日本の授業研究をなしているが、1990 年代後半から始まった Lesson Study への注目は、日本の授業研究の一部だけが独り歩きしているように見える。この問題状況に対して、日本の授業研究の全体像を描き出す試み（National Association for the Study of Educational Methods, 2011）や、比較教育学の観点から日本の授業研究を相対的に捉える試みがなされてきた（Rapplee & Komatsu, 2017; Selezynov, 2018）。

こうした日本の授業研究を取り巻く国内外の研究動向を背景としながら、日本の授業研究と教師教育の接点を考察した書籍が Kim, J., Yoshida, N., Iwata, S., & Kawaguchi, H. (Eds.). (2021). *Lesson study-based teacher education: The potential of the Japanese approach in global settings*. New York, NY: Routledge. である。同書は日本の授業研究の系譜に基づきながら、教員養成・現職教育・教師教育者養成の各段階にまで教師教育の視野を広げ、広島大学をハブとした研究・実践の蓄積を世界的な Lesson Study 及び教師教育研究の動向の上に提示しようとする取組である。

本共同研究プロジェクトは、上記の書籍の発刊を契機としながら、授業研究に基づく教師教育の国際共同研究プラットフォームの構築に 3 年計画で取り組むことを主題とする。3 年間の成果は、令和 4 年に広島大学で開催される International Network of Educational

Institutes（以下、INEI）総会でハイライトされ、その後、授業研究に関するさらなる国際共同研究を生み出すことが期待される。令和2年度の報告書では、その1年目の研究成果を示すこととした。

（金 鍾成*・吉田成章・岩田昌太郎・川口広美）

Ⅱ プラットフォームづくりの方法としての連続セミナー

本共同研究の目的を達成するために、3か年で継続的にセミナーを開催し、日本の授業研究の発信と世界の「Lesson Study」との交差点を探りながら、授業研究に基づく教師教育について研究できる国際共同研究プラットフォームの構築を目指す。そのなかの1年目である令和2年度では、Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi（2021）編集の成果に基づき、授業研究に基づく教師教育の研究ネットワークの構築を試みた。広島大学教育ヴィジョン研究センター（Educational Vision Research Institute；以下、EVRI）の支援のもとで行われた一連のオンラインセミナーの詳細は以下の通りである。なお、本報告書提出時点（2021年2月15日）時点では第6回セミナーは未実施であるが、すべてのセミナーの報告はEVRIのホームページ（<https://evri.hiroshima-u.ac.jp/>）より閲覧することができる。

○第1回：「日本の授業研究を軸にした教師教育の現状と課題」

- ・日にち：2020年11月2日（木）10:30-12:00
- ・司会：吉田成章・岩田昌太郎（広島大学）
- ・話題提供者：金 鍾成（広島大学）
「日本の授業研究に基づく教師教育に対する批判的検討」
- ・指定討論者：Jeremy Rappleve（京都大学）

○第2回：「国際教育開発の視点からみた授業研究を軸にした教師教育の展望」

- ・日にち：2020年12月3日（木）14:00-15:30
- ・司会：吉田成章・岩田昌太郎（広島大学）
- ・話題提供者：齊藤一彦（広島大学）・白石智也（広島文化学園大学）
「スポーツ教育開発における授業研究アプローチの可能性—ウガンダとペルーを事例に—」
- ・指定討論者：馬場卓也（広島大学）・勝田 隆（日本スポーツ振興センター理事・ハイパフォーマンススポーツセンター長）

○第3回：「学校内外の授業研究を語る」

- ・日にち：2020年12月28日（月）14:00-15:30
- ・司会：金 鍾成・川口広美（広島大学）
- ・話題提供者：岩田昌太郎（広島大学）・濱本想子（名桜大学）
「学校内の授業研究を語る」
三好美織（広島大学）・小松真理子（広島大学大学院 院生）
「学校外の授業研究を語る」

○第4回：『Lesson Study-based Teacher Education』の編著者との対話」

- ・日にち：2021年1月14日（木）19:00-20:00
- ・司会：金 鍾成・川口広美（広島大学）
- ・話題提供者：金 鍾成・吉田成章・岩田昌太郎・川口広美
「授業研究をどう定義するか。また、その教師教育的な意義とは何か」

○第5回：「新しい授業モデルへの転換に教員養成はどのように応えるのか？」

- ・日にち：2021年1月28日（木）18:30-20:00
- ・司会：川口広美・渡邊 巧（広島大学）
- ・話題提供者：川口広美（広島大学）・間瀬茂夫（広島大学）
「教員養成課程における授業研究を語る」
宮本浩治（岡山大学）・間瀬茂夫（広島大学）
「新しい授業モデルへの転換に教員養成はどのように応えるのか」

○第6回：「異職種協働の視点からみた授業研究を軸にした教師教育の展望」

- ・日にち：2021年3月2日（火）10:00-12:00
- ・司会：金 鍾成・川口広美（広島大学）
- ・話題提供者：吉田成章・松田充・宮本勇一・杉田浩崇・熊井将太・福田敦志
「レッスン・スタディの研究動向と多様なステークホルダーへの着目」
- ・指定討論者：Catherine Lewis（ミルズ大学）
（金 鍾成*・吉田成章・岩田昌太郎・川口広美）

Ⅲ プラットフォーム形成の実際：全6回のセミナーの振り返り

1. 第1回：「日本の授業研究を軸とした教師教育の現状と課題」

「授業研究を軸に教師教育を変革する」シリーズの第1回セミナーとして、2020年11月5日（木）に、EVRI第52回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する（1）「日本の授業研究を軸にした教師教育の現状と課題」を開催した。第1回セミナーは、Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi (2021) の編集の意図と経緯を振り返りながら、「日本の授業研究＝Jyugyou Kenkyuu」を国際的な視野から捉えることの意味に焦点化した企画である。

上記著書の筆頭編者である金鍾成が、日本の授業研究に直間接的に関わってきた「異邦人」の視点から、日本の教師教育における授業研究の活用場面の全体図を描き出し、それがどのような前提の上になりたっているのかを批判的に検討した研究成果を報告した。ここではまず、日本の教師教育を4つの領域、すなわち幼稚園から高校生までの「被教育体験」、教育志望学生、現職教員、教師教育者や研究者にわけ、そのなかでの授業研究がどのように活用されるかが具体例とともに説明された。その上で、先行研究やこれまでの自身の授業研究の経験に対するメタ分析に基づき、①授業研究に対する行政的・制度的支援、②授業研究の共有された「文法（Grammar）」、③教授・学習の改善のための協同に基づく価値システムが日本における授業研究の成功を支えてきたことが指摘された。今後のより良い授業研究の実践のためには、トップダウンの授業研究の広がりへの弊害を防ぐために授

業研究の哲学の共有が重要であること、教師の学びの実証研究に基づいて教師の学びを向上させるための授業研究の在り方を考えることなどが問題提起された。さらに今後新たに授業研究を導入しようとする人々に対しては、各自の文脈における教師教育システムと社会・文化的背景を日本のそれを比較することや、日本も絶えずレッスン・スタディ／授業研究の文化を再生産していることを想起しながら、各自の文脈においてその文化を生産・再生産するための努力を行うことが提案された。

この提案に対して指定討論者である Jeremy Rappleye 氏からは、日本において授業研究を支えてきた社会・文化的な背景を探るとともに、授業研究が教師教育の文脈でどのように用いられているかを具体的に説明したことに本書刊行および金氏の提案に意義があるとした。氏の指定討論を交えての質疑では、日本の授業研究の改善のための実証的研究の必要性に対する疑問や、日本の社会・文化的な規範を説明する際に登場した「みんなおなじ」という表現の適切性に対する疑問が出された。これに対して、教師の学びを実証的に研究することによって授業研究のやり方、ひいては在り方を検討することが必要であると、また「みんなおなじ」という表現は、「みんなおなじ考え」ではなく「みんなおなじ立場で異なる意見を交わす場としての授業研究」を意味することが確認された。

本セミナーを通じて、日本における授業研究が行政的支援も受けながら強制的な営みとなることで、もともと教師の自主的な教育改善運動として展開されてきたその意義が縮減されかねないのではないかと、そもそも教師の専門的力量をどのように捉えるのかという国際的かつ実践的な重要課題が共有され、Rappleye 氏との今後の共同研究体制構築の重要性が確認された。

2. 第2回:「国際教育開発の視点からみた授業研究を軸にした教師教育の展望」

第2回セミナーは、2020年12月3日(木)に、EVRI第56回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する(2):国際教育開発の視点からみた授業研究を軸にした教師教育の展望」として開催された。第2回セミナーでは、Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi (2021)にウガンダとペルーのスポーツによる授業研究の論考を寄稿した齊藤一彦氏と白石智也氏の提案を軸に、馬場卓也氏と勝田隆氏の指定討論のもとで国際協力とスポーツによる授業研究の可能性と課題について検討がなされた。

「スポーツ教育開発における授業研究アプローチの可能性」と題する提案において齊藤氏と白石氏は、ペルーおよびウガンダでの国際協力の文脈で実施されたスポーツ・体育の授業研究の経験と取組を基に、スポーツ・体育による教育改善であることの意義、そして授業研究による国際教育開発であることの意義を提案した。

本提案に対して馬場氏は、国際協力に長年携わってきた豊富な研究・実践の経験を背景に、日本の「授業研究」の考え方を一義的に諸外国に委譲していくことの課題を強調した。あわせて、授業研究における二つの葛藤、すなわち教育方法学的な授業の見方を強調する立場と教科教育学的に授業の計画のあり方を強調する立場の葛藤、そして教育に携わる内部の視座と外部専門家の視座との葛藤、それぞれを描きながら「現地の知」を見いだす国際協力としての授業研究の可能性を指摘した。勝田氏は、高校教員としての経験や現職での立場から、スポーツ・体育による人格形成的意義を強調し、スポーツそのものに求められる言語・コミュニケーションの重要性に加えて、認識によるスポーツを軸とした教育改

善のグランドデザインを提起した。

議論を通じて、「日本の授業研究」を世界的な視野から実践の知として検証していくことの重要性と、教育学内部の専門の多様性だけではなく、子どもと実践を取り巻く関係者＝ステークホルダーの多様性を視野に入れた授業研究プラットフォーム形成の重要性が示唆された。

3. 第3回：「学校内外の授業研究を語る」

第3回セミナーは、2020年12月28日（月）に、EVRI第62回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する（3）：学校内外の授業研究を語る」として開催された。話題提供者である岩田昌太郎・濱本想子は学校内の授業研究について、三好美織・小松真理子は学校外の授業研究についての原稿をKim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi（2021）に寄稿した経緯から、学校内外の授業研究というそれぞれの報告内容から授業研究の教師教育にとっての意義と課題について議論を行った。

本セミナーでは、「研究者としての教師像と授業研究の関係性」「授業研究における『知識』の意味とその『知識』と教師の関係性」「授業研究における教師教育者の役割」「教科をつらぬく授業研究の可能性と意義」などのキーワードが浮き彫りになり、「授業研究を軸に」する教師教育の意義と可能性の議論を深めることとなった。すなわち、授業研究には多くの研究者と教師、そして大学院生や授業担当ではない教職員も参加する。それぞれにはそれぞれの専門性と関心があり、「研究者」という立場だけで見てもその研究角度は多様である。それぞれの違いと専門領域の重要性を強調するだけではなく、すべての者が子どもの教育に関わっているという点、そして何らかの形で教師教育にも携わっているという点から、「授業研究」という営みそのもの、そして「教師教育」という営みそのものを、セミナーへの多様な参加者とのネットワークのもとで継続的かつ具体的に深めていく必要性が確認された。

4. 第4回：「『Lesson Study-based Teacher Education』の編著者との対話」

第4回セミナーは、2021年1月14日（木）に、EVRI第63回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する（4）：授業研究を軸にした教師教育（Lesson Study-based Teacher Education）の編著者との対話」として、Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi（2021）の編著者であり、本共同研究プロジェクトの研究者4名による座談会形式にて開催された。セミナーでは、「授業研究をどう定義するか」、「教師教育における授業研究の意義は何か」、「日本の授業研究の長所と短所は何か」という3つの問いに対して議論を行い、その話し合いに対してオーディアンスも各自の見解を述べる形で会が進められた。

最初に議論になったのは、授業と授業研究の定義であった。まず、授業を教師の「実践」として捉えるか、もしくは子どもと教師を取り巻く「現象」として捉えるかによって、授業研究の意味も変わるという理解が共有された。さらに、授業「を」研究することと授業「で」研究することの意味の違い、さらに授業「の」研究、授業「のための」研究、授業「による」研究の意味の相違など、授業研究の対象、目的、主体によって授業研究が持ちうる意味合いが異なるという理解も共有された。授業研究を定義する際の論点が浮き彫りになった一方で、なぜ授業研究を定義することが難しいかが同時にわかる機会となった。

このことは、授業研究における研究方法論の問題とも接合する点である。

教師教育における授業研究の意義としては、教師の主体性、専門性が発揮できる方法であること、子どもの学びに焦点を当てながら専門性開発を目指すこと、専門家集団の協力による授業改善を目指すことなどが議論された。特に、「専門家としての教師」「研究者としての教師」を育てるために授業研究が有効であるという認識が共有されたが、上述した授業の定義の相違から生じる各々の研究者が考える「専門家像」「研究者像」の相違も見られることが浮き彫りとなった。

参加者との議論の中では、授業研究の哲学の共有がなされずに Top-down の形で授業研究が行われていることに課題があるという指摘や、「なぜ、授業を研究する必要があるか」に対する教師個人への探索なしでは、授業研究が形骸化・形式化されてしまい、負担でしか感じられなくなるという問題関心が共有された。こうした議論の延長線上に編まれたのが Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi (2021) であるが、本書刊行を契機としてより様々なテーマのもとで授業研究に関わる多様なステークホルダーによる共同探究のためのネットワーク構築の重要性が確認された。

5. 第5回：「新しい授業モデルへの転換に教員養成はどのように応えるのか」

第5回セミナーは、2021年1月28日（木）に、EVRI 第65回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する（5）：新しい授業モデルの転換に教員養成はどのように応えるのか」として開催された。世界的に現職研修（in-service teacher education）の方法論として用いられることが多い傾向にある Lesson Study の動向に対して、新しい授業モデルへの転換に大学における教員養成がどのように応えるか、というテーマを軸にしながら、「大学」の教員養成の役割や、授業研究のあり方について考えを深めることを目的に設定されたのが本セミナーであった。

セミナーではまず、Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi (2021) に教員養成における授業研究のあり方について執筆した川口広美・渡邊巧、および間瀬茂夫が、「教員養成における授業研究とは何か」、「教員養成における授業研究の意義は何か」という2つの問いに対して検討した。両論考から示されることでもあるが、教員養成において「授業研究」はその実施形態や目的においても多様である。むろん、教員志望学生が実際に指導案を作り、授業を行い、振り返るというプロセスをすべて行うという場合もあるが、授業分析のみ、授業開発のみを行う場合もあり、また、教師が行う授業研究のプロセスを観察者として検討する場合もある。さらに授業研究を行う目的も、教師としての即戦力となるべく円滑な移行を重視するものもあれば、学校の現状を変革することをめざすものもある。この背景には、「大学」を学校と連続したものとして捉えるか、非連続として捉えるかという発想の違いも潜んでいるのである。

三者からの提案に接続して、宮本浩治（岡山大学）氏が「新しい授業モデルの転換に教員養成はいかに応えるか」というトピックから話題提供を行った。宮本氏は主に教育実習などの実習系科目において、指導案を作成したり、観察したりするプロセスを通して、自分の中にある授業観や教科観と向かい合うこと、そして、さらに他者の授業を研究する際の視点を得ることを重要とし、教師としての「体幹」を作るための授業研究の重要性を提起した。

フロアとの対話においては、「国語科の授業研究は国語科でしかできないのか」という問いから、教科横断や教科間連携による授業研究の模索も議論された。また、授業研究を通して、実際に教師がどのように実践に根差した「理論」を再構築させているかの具体例についての質問や、テレビなどの学校外で作られた授業イメージが授業研究の素材になり得るかという問いがあり、授業研究を教員養成と結びつけていく多様な方途が見出された。

第6回セミナーは本報告書原稿執筆時点では未実施であるが、シリーズ最後のセミナーはこれまでの議論をある意味包括し、国際的な視野から多様な授業研究のあり方を模索するものとして企画された。国際的な Lesson Study の研究動向の地図の上に、養護教諭や地域の方の授業研究への参画の事例を踏まえた話題提供を踏まえて、長年にわたって米国から Lesson Study をリードしてこられた Catherine Lewis（ミルズ大学）氏の指定討論によって、授業研究における多様なステークホルダーの意義を浮き彫りにしようとする企画である。

これらの連続セミナーの実施を通じて得られた成果は、①オンラインによるこれまでにないネットワーク形成に着手できたこと、②Kim, Yoshida, Iwata, & Kawaguchi（2021）執筆者による研究・実践ネットワークに指定討論者を交えたより強固なネットワーク形成へとつながることができたこと、③セミナー開催を通じて学校教員や大学院生といった多様な授業研究参加者とのネットワーク形成の基盤を構築できたこと、の三点に集約される。ただし、本連続セミナーでは実際の授業研究をオンラインで実施することの可能性と課題には踏み込むことができていない。本セミナー実施によって構築されたネットワークを基盤として、より理論的かつ実践的な水準で「授業研究を軸とした教師教育」の意義と課題に言及していくことが今後の課題として残されている。

（吉田成章*・金 鍾成・岩田昌太郎・川口広美）

IV 本研究の成果と今後の課題

「授業研究」を軸にした教師教育に関する連続セミナーを通して、150人を超える人々がつながるプラットフォームを形成することができた。大学に勤める教師教育者だけではなく、教員志望学生、現職教員も交えて授業研究を軸にした教師教育について考える機会を設けたこと、また日本国内の文脈に閉ざされず、日本の授業研究を軸にした教師教育を異質な視点から分析・批評できる「異邦人（Stranger）」（Simmel, 1950）との関係性が築けたことは本研究の成果である。

今年度の研究はまだ終わっていない。2021年3月には、授業研究を軸にした教師教育に関するプラットフォームをより積極的に海外に広げる予定である。第6回のオンラインセミナーには英語通訳を用意し、日本語ができない海外オーディエンスにも参加していただくようにする計画である。また、1回から5回までのオンラインセミナーの内容をEVRIが主催するINEIの行事のPeace Education and Lesson Study for Teacher Education（PELSTE）に教材として提供するなど、既存の研究成果の世界への発信も心掛けている。

授業研究に対する多様な問題関心を有する人々のつながりは、各教科内にとどまりやすい授業研究の議論を、通教科的に、さらには教科教育学と教育学を含む通領域的に変革させた。新しく創造された授業研究に関する公共圏のなかでは、各教科・領域における「当たり前」の再検討が要請された（例えば、教科教育学では、なぜ「目標」「内容」「方法」

で授業を研究するか。教育学では、なぜ「子どもの学び」「教師の子どもの見方」「学校づくり」「地域づくり」で授業を研究するか)。今後、より多くの人々がプラットフォームに参加すると、各教科の授業研究、各領域の授業研究、各国の研究の前提がもっと激しく揺さぶられることになるだろう。しかし、授業研究を軸にする教師教育をより良くしたい人々が集まる以上、その「破裂」は必然的に建設的であろう。今後、建設的な「破裂」を可能にするプラットフォームの形成・拡大の戦略の考案、さらには、その「破裂」から導かれる様々な研究テーマを発掘し、それを研究につなげるシステムの構築が必要である。来年度からの研究では上記の二つの課題に応えていきたい。

(金 鍾成*・吉田成章・岩田昌太郎・川口広美)

引用文献

- ・ 広島大学教育ヴィジョン研究センター (EVRI) (<http://evri.hiroshima-u.ac.jp/>)
- ・ Fernandez, C. (2002). Learning from Japanese approaches to professional development: The case of lesson study. *Journal of teacher education*, 53(5), 393-405.
- ・ Kim, J., Yoshida, N., Iwata, S., & Kawaguchi, H. (Eds.). (2021). *Lesson study-based teacher education: The potential of the Japanese approach in global settings*. New York, NY: Routledge.
- ・ Lewis, C., Perry, R., & Murata, A. (2006). How should research contribute to instructional improvement? *The case of lesson study. Educational researcher*, 35(3), 3-14.
- ・ National Association for the Study of Educational Methods (Ed.). (2011). *Lesson study in Japan*. Hiroshima, Japan: Keisuisha.
- ・ Rapple, J., & Komatsu, H. (2017). How to make Lesson Study work in America and worldwide: A Japanese perspective on the onto-cultural basis of (teacher) education. *Research in Comparative and International Education*, 12(4), 398-430.
- ・ Seleznyov, S. (2018). Lesson study: An exploration of its translation beyond Japan. *International Journal for Lesson and Learning Studies*, 7(3), 217-229.
- ・ Simmel, G. (1950). *The sociology of Georg Simmel*, trans. K. H. Wolff, New York, NY: Free Press.